

### （３）自然現象と災害と暮らし

自然災害が頻繁に起きるものであれば、そのようなところに住んでいる人はいないわけで、極端に言えば、起きないとかそんなこと一顧もすることが無いので、災害を意識することなく住んでいるということもできます。ところが、災害はいつ起きるかはわからないものの、大雑把にはどこで何が起きるのかはおおよそ想定できます。つまり過去の履歴や地盤の構成などから、自然災害が想定できることが救いになっています。

したがって、そのようなリスクがあるところを避けるということが良いのです。しかし、そんな暮らし方ができたのは人口がすくなく生活する糧も生産方法やスタイルも限られていた人間の初期の時代だけだったと思います。時代が進行するとともに、生活のスタイルも人口も増加してきて、暮らしも複雑になり、産業も多様化してきます。そうすると、わが国のような狭い国土は高度に利用するか、居住域を新たに造成していかなければならなくなってきました。

いってみれば利便性が最大に求められ、土地が有する潜在化したリスクは無視されるということになります。過去のことなどはどうでも良くて、先を見て走り出してしまいました。仮に、大きな災害があり、その要因が明らかになったとしても災害は時間と世代交代もあって風化し、忘れられモニュメントや記録としてだけひっそりとあるだけになってしまいます。そして、災害があると、これまで聞いたことがないとか、経験したことが無いということになって、目にしたことだけが偶然に遭遇した自分だけの不運のようにいわれます。

今、わが国は人口減少とか高齢化などといわれ、今後のあり方が問われ、さまざまな考え方が飛び交っています。特にＩＴというこれまで経験したことの無いようなデータ×ＡＩの世界が好悪を別にしても展開されています。しかし、異星に移住することなしにこの列島で暮らすということであれば、自然災害との付き合いが続くことは確かです。そして、災害の復旧や復旧への投資は思いがけない出費ですし、その費用は出来るだけ最小にすべきものです。それには、初期投資をして災害に備えるということが最も賢明なことのような気がします。

それは、耐震化とかリスクを明確にして回避するとかになりますが、それへの理解は正しい知識や経験を理解することにあると思います。つまり、国土の環境を理解して、適切に利用していくこと、これまでの歩みを修正・改善することだと思われます。

それには大きな柱としては、学校教育における災害への学習、国土のハザードマップ化による情報伝達、土地のゾーニング、山地の維持、保全、管理の一元化です。

学校における防災授業は訓練を含めてさまざまな形で行われていますが、この日本列島について、自然科学的な視点からの学習が最も基本的であると考えています。自分たちが住む日本列島がどのような自然環境にあって、それがゆえにどのような自然現象の影響を受けるのかをしっかりと知ることが大事だと思います。そのような環境が、長い間の文化になっているわけだし、先人が自然条件をどのように活かしながら、あるいは避けながら生きてきたのかということを多面的に学習することが大事だと思います。

そして、自然災害がどのような素因と誘因のもとで発生するのかを知った上で、どう対応すべきかについて話し合いまたは地域を事例に考えていくということを重ねていって欲しいと思います。そのような基本的なものがあれば、実際に災害が発生したときに応用が利きますし、情報の整理や判断が適切に行えることにつながるような気がします。そうでないと、情報に惑わされるとか自分に都合の良いものだけを収集して間違った行動を起すというようなことはならないと思います。また、日常的にも災害への関心が継続するようになって、自然災害の対象となるあるいは障害となるような行動は避けられるのではないかと思います。

ほとんどの地方自治体では、地震・津波、土砂災害、水害、火山噴火などに関わるハザードマップが公開されています。一度は見られた方もいると思いますし、災害時の情報でも必ず確認するように繰り返されているので、大分知られてきていると思います。情報内容が豊富ですので是非とも参考にして欲しいと思います。しかし、見るものから知るもの、活用するものにするには学校や地域単位での学習が必要です。つまり、使い方を浸透させていかないと、宝の持ち腐れになります。

ところで、このハザードマップを見ると、居住地域は災害のリスクがあると思われるところに関係なく分布していることがわかります。道路なども見てもまさに利便性が優先されているという印象を強く受けてしまいます。そこで、旧地形図と見比べてみると、特に平野部のほとんどのところで、もともとの地形のところを改変していることがよくわかります。つまり、昔は人があまり利用してこなかったところがどんどんと開発されているさまが読み取れます。人が選択的に利用してこなかったのにはさまざまな理由があって、それがリスクになっていることが多いのです。単純に思うこ

とは、土地を住み分けることが出来ないのだろうか、そうすればリスクが小さくなるのではないかと思います。

土砂災害にしても豪雨災害にしても、そのもとは山地にあります。その典型は土石流で最近では自然災害の中でも発生規模も頻度も多くなっています。これには、山地の環境が大きく関係していて、流動するのは土石だけでなく流木も多くなっています。つまり森林環境が悪化していることがあり、森林が有するさまざまな機能が低下している状況にあるように思います。もちろん、砂防ダムや水路工、斜面对策など山地災害防止工がなされてはいますが、追いつかないばかりか、設計条件を超える自然現象が多様化しているのが現実なのです。